

以降、布教を再開し教勢を拡大した日系新宗教は、その時期が韓国の軍事政権の下での強力な近代化政策の推進と「漢川の奇跡」といわれた高度経済成長期、それに伴う離村向都が生じた時期と重なっている。こうした状況のなかで韓国の伝統的価値観が崩れ始め、工業化・都市化に見合った価値体系が必要とされた。たとえば、創価学会(KSGI)は、現在の不満足な境遇は自ら前向きに取り組んでいくことで「宿命転換」ができ、プラス思考で「変毒為薬」して道を開くことができることを積極的にアピールしたが、そのような考え方は、伝統的社会ではなく都市社会―個人の努力によって生活の向上が可能な流動化した社会―と親和的であったのである。

韓国のメディアを通じてみる「倭色」宗教

諸 点淑

韓国では、日本系宗教が「倭色」宗教とも言われている。「倭色」とは「和風」「日本風」「日本的なもの」を意味する。つまり「倭色」宗教とは日本で生まれたり、あるいは日本的な傾向を持つ宗教を意味する。韓国のメディアにおける「倭色」宗教は、一九六五年「日韓国交正常化」を発端として韓国社会に登場することとなった。「日韓国交正常化」は、日本系宗教の本格的な韓国進出の踏み台となったが、むしろメディアを通じて、「倭色」宗教への批判と警戒を促す新聞記事が韓国社会に拡散される契機にもなった。その後、一九九五年、日本で発生した「オウム真理教事件」により、日本系宗教を警戒する内容の記事が新聞で大きく報道され、日本系宗教に対する排他的

な機運が韓国社会により高まることとなった。このような韓国社会に刻印された「倭色」宗教という日本系宗教への敏感な反応は、毎年八・一五記念日(日本から解放された日)になると、確実に再生産されてきた。だが、皮肉にも韓国社会の反日感情の中においても日本系宗教の信者は増加しつつあるのである。

本研究では、このような反日感情の中でも教勢や信者が増加している日本系宗教の現象に注目して、日本系宗教、つまり「倭色」宗教が韓国社会に定着していく時代的流れや「倭色」宗教に対する今日の韓国社会における認識の変化を、新聞記事を通して考察することを目的としている。「倭色」宗教は、植民地という歴史を経験するなかで形成された、日本的なものに対する反感や被害意識などといった複合的な情緒の中で、韓国社会に深く根を下ろしていった。しかし、このような意味合いを有していた「倭色」宗教であるが、二〇〇〇年代に入ってから、批判と警戒をこめた新聞記事が前に比べ大きく減少する現象をみせている。これはおそらく、「倭色」宗教に対する韓国社会の関心が薄まりつつあることを意味すると同時に、韓国社会における「倭色」宗教への認識が変化したものとしても解釈できるだろう。無論、こういった現象には、日本系宗教の韓国での土着化過程や積極的な社会活動も一役買ったであろうことも見逃せない。

「倭色」宗教をめぐる韓国社会の認識変化を新聞記事を中心に捉えるため、本研究では、一九六〇年代から現在に至るまでの「倭色」宗教と関連する新聞記事を検討し、時代別の報道状況と韓国社会における反応を分析する。また事例研究として、

韓国立正佼成会に焦点を当て、その現状と「倭色」宗教としての立場について新聞記事を通して検討し、韓国社会の反応を試みたい。これまでは韓国で「倭色」宗教といえば、代表的に創価学会、天理教、日蓮禪宗などを指していたが、これらを論じることは、韓国社会のメディアによって構築された枠組の中の議論という点が限界である。したがって本研究では、韓国メディアからそれほど注目されてこなかった韓国立正佼成会という小規模教団を研究対象として、より多様な観点から「倭色」宗教をとらえてみたい。

在日大韓基督教会と韓国系キリスト教会の日本宣教

中西 尋子

一 はじめに

キリスト教信者が人口の1%に満たない日本において、一九九〇年代以降、韓国系キリスト教会が活発な宣教活動を展開し、日本各地に教会が設立されている。どれくらい数の韓国系キリスト教会があるか実態は未だ明らかになっていないが、『クリスチャン情報ブック二〇一〇』（いのちのことば社）の教会情報から韓国系キリスト教会と思われる教会を抽出すると、およそ二〇〇〜三〇〇程度の教会があることが推察される。

信者の多数はニューカマーの韓国人であっても、教会によってはある程度の日本人信者を獲得している教会もある。日本人信者の獲得に成功している教会はそれが可能にしたのだろうか。そこで本発表では、時期を異にして朝鮮半島から流入した二つのキリスト教、在日大韓基督教会と韓国系キリスト教会

の日本宣教や礼拝のあり方から日本人信者の獲得の要因を探る。この二つを比較する理由は、出所は同じ韓国キリスト教でありながら、先に流入した在日大韓基督教会よりも後に流入した韓国系キリスト教会のほうが日本人信者の獲得に成功している教会があるからである。比較する教会は、在日大韓基督教会の大阪西成教会（一九二三年設立）と韓国系キリスト教会の大阪オンヌリ教会（二〇〇〇年設立）である。

二 在日大韓基督教会―大阪西成教会

大阪西成教会は現在でも韓国語による礼拝を行っている。かつて在日韓国人の一世が信者の多数を占めていたときは韓国語による礼拝が当然であったが、在日韓国人社会の世代交代とともに徐々に日本語使用の機会が増している。しかし礼拝の言語を全面的に韓国語から日本語へ切り替えようとする動きは見られない。在日大韓基督教会にはかつて内鮮一体の国策のもとで日本語使用が強制されたが、それに抗して韓国語で礼拝をまもった歴史がある。韓国語は伝達手段としての言語というよりアイデンティティの拠り所であった。それだけに韓国語を理解しない世代が信者の大部分を占めるようになってからも韓国語による礼拝が続けられている。

三 韓国系キリスト教会―大阪オンヌリ教会

大阪オンヌリ教会では、信者の三分二はニューカマーの韓国人である。しかし日曜日のもっとも中心となる一時から礼拝は日本語で行われる。ニューカマーといってもみな日本語をある程度理解するので同時通訳を聞いている人はほとんどおらず、日本語で礼拝が行われることについて尋ねても「みんな日